# 論 文 審 査 の 要 旨 及 び 担 当 者

**論文題名**

フランスにおけるロマンティック・バレエの隆盛と衰退

**論文審査の要旨**

**[本論文の概要と構成]**

本論文の対象は「ロマンティック・バレエ」の名称で知られる、19 世紀フランスのオペラ座で生まれたバレエ様式である。本論文は、七月革命直後に断行されたオペラ座の民営化、フットライトとガス灯など舞台照明技術の革新、タリオーニやエルスラーなど女性スターダンサーを前面に出すスターシステムの導入など、ロマンティック・バレエとその革新的な興行システムを、テクノロジーを含めた同時代の文化的・社会的背景から検証する。

本論文は、従来男性であった主役ダンサーを女性に変えるという、ロマンティック・バレエが生んだパラダイム転換に注目し、この変化からロマンティック・バレエの隆盛と衰退を説明した点に独創性を持つ。高橋氏は、ロマンティック・バレエ作品とその上演を網羅的に調査し、女性スターダンサーがメディアで脚光を浴びる反面、筋書きが簡素化され、宮廷バレエの主役だった男性ダンサーが日陰に追いやられる現象を明らかにする。本論文は、七月革命以降の共和政時代に繁栄したロマンティック・バレエがなぜ半世紀後の 19 世紀末には衰退したのか、またなぜバレエの中心が 19 世紀末ごろにはロシアに移っていったのか、隆盛から衰退に至る経緯とその諸要因を同時代の一次資料を通じて検証する、ロマンティック・バレエとその歴史の包括的な研究である。

本論文は、序論と 3 つの章、結び、引用・参照文献一覧から構成される 261 ページの日本語論文である。高橋氏は、序論で「ロマンティック・バレエ」の定義と適用範囲を明示し、16 世紀から今日に至るまでのバレエ史を概観したうえで、ロマンティック・バレエの歴史的な位置づけを明確にする。第 1 章は、男性ダンサー中心から女性ダンサー中心への転換を促した諸要因を考察し、オペラ座の民営化による興行システムの刷新、芸術における「ロマン主義」の出現、ガス灯やライムライトなど画期的に進化した舞台照明技術という、3 つの領域においてその諸要因を分析する。第 2 章は、女性ダンサー中心へ転換したロマンティック・バレエの特性を、スターダンサーとその他大勢の下級ダンサーとの二極化、パトロンとの愛人契約など風俗面での荒廃化、男性ダンサーの数と役割における低下に注目して検証する。第 3 章は、ロマンティック・バレエの現存するテクストすべてを対象とし、女性ダンサーをコンテンツの中心に据えた結果起こる現象、すなわち筋書きやフィクション世界における人間関係が単純化・規格化されていく現象を明らかにし、芸術的な創造性が失われる結果、演出家やダンサーなど主力

のバレエ関係者たちがロシア・バレエに流出していく歴史的経緯を明らかにする。巻末の引用・参照文献一覧は、19 世紀イギリスおよびフランスの新聞・雑誌、テクノロジー関連の一次史料、19 世紀フランス社会史、ロマン主義、ジェンダー研究に関する二次史料などを含め、多領域にわたる文献を掲載した 18 ページにわたる労作である。

**第１章「ロマンティック・バレエの成立と隆盛」要旨**

第 1 章は、ロマンティック・バレエという用語で知られる新たなバレエ様式が 1830 年代から生まれ、隆盛を極めるに至るその社会的、文化的、テクノロジー的背景を分析する。本章は 4 節に分けられ、第 1 節ではロマンティック・バレエ以前のバレエ様式がどのような歴史的変遷をたどったのかを、バレエ理論、ダンス様式、衣装、演目の題材、観客層に注目して検討する。演目の題材では宮廷/貴族文化の象徴であった古代英雄物語が影をひそめるようになり、舞踏理論では「男らしい踊り方」と「女らしい踊り方」がより明確に区分化され、バレエ衣装も宮廷風の豪華で重い衣装から、ダンスにより適した庶民の普段着に近い軽やかなものへと変わる傾向があったことが示される。

第 2 節は、舞台照明の歴史を俯瞰し、19 世紀初めにおけるガス灯照明の導入がバレエの見せ場や演出、台本を大きく変えたことを検証する。従来の蠟燭やランプオイル照明は、舞台上のダンサーの表情や動きをはっきりとは映し出せなかったが、ガス灯照明のフットライトはダンサーの身体、とくに女性ダンサーの脚を見えるようにさせた。高橋氏は前節において、18 世紀末から女性ダンサー用衣装に透けたモスリン地が使われるようになる傾向を指摘したが、本節では照明技術の発展により、女性の身体を売り物にした視覚優位のコンテンツが加速度的に発達する現象を検証している。

第 3 節は、同時代における「ロマンティック」の定義を援用し、庶民性、地方性、超自然的幻想、現実と非現実の対比という、ロマンティック・バレエを特徴づける「ロマンティック」な要素 4 点を指摘する。本節では、ロマンティック・バレエにおいて妖精/精霊の登場が決まり事となる結果、第 1 幕の現実世界と第 2 幕の超自然界というバレエ構成のフォーマットが導入されることになり、演出においても白色あるいは透明の色彩感や儚さ、脆さが強調される傾向が指摘される。

第 4 節は、ロマンティック・バレエが生み出した伝説的な 3 名の女性ダンサー、マリー・タリオーニ、ファニー・エルスラー、カルロッタ・グリジを取り上げ、この 3 人が大スターにのし上がる経緯を解説する。このスターダンサーたちは、タリオーニの空気の精シルフィードやグリジのジゼルなど、それぞれが十八番の役柄を持っており、同時期の新聞や婦人雑誌でもその役柄のイメージで紹介されたために、タリオーニたちは今日のサブカルチャー・ファン（オタク）のような熱狂的な崇拝者を獲得することになる。

**第２章「スターシステム」要旨**

第２章は、ロマンティック・バレエを特徴づける興行システム（本論では「スターシステム」という用語で表される）が紹介され、崇拝の対象となる主役のスターダンサーと、パトロンと

の愛人契約によって生計を立てていく下級ダンサーの著しい二極化を生みだしたスターシステムの功罪を検証する。第1節では、まず19世紀のステレオタイプ的な理想的女性像と宿命の女（ファム・ファタル）が分析される。その分析を踏まえ、ロマンティック・バレエがその時期のステレオタイプに合致する、ロマン主義的な二項対立の物語設定を定式化し、主役スターダンサーと準主役ダンサーがそれぞれ聖母的な妻/婚約者および主人公を誘惑するファム・ファタル役に配されるようになることが指摘される。

第2節「メディアとスターダンサー」では、高級文化のイメージを担ったロマンティック・バレエの「芸術」性と「高尚」感が、新聞・雑誌におけるリトグラフやロマン主義文学者、ジャーナリストの礼賛記事によって広く拡散していたことが、同時代の一次資料の分析を通じて明らかにされる。本節で明らかにされるのは、広く流通していたスターダンサーたちの聖母的、女神的なイメージ（本人とは正反対であることが多かった）もメディアによって作られたものであり、民営化されたオペラ座の新総裁ヴェロンが意図的に「タリオーニ派とエルスラー派の対立」などの情報を拡散させ、オペラ座の大赤字を瞬く間に改善させることになった。

第3節「下級ダンサー」は、前節のスターダンサーと対照的に、ロマンティック・バレエの商業主義や猥雑性という負のイメージを担わされた下級ダンサーたちの実態を検証した節である。本節では、ルノワールやドガの絵画、ゴーチェの言及によって知られる8歳から16歳の「オペラ座ネズミ」の日常が分析され、スターダンサー以外の大多数の少女たちが主にオペラ座定期会員と愛人契約を結ぶことによって生計を立てていた実情が紹介される。

第4節「男性ダンサーとロマンティック・バレエの衰退」は、1830年代の初期から批評家、観客などから男性ダンサーの存在に対し、「醜い、鑑賞の邪魔」など手厳しい批判が投げられ、結果としてオペラ座も、タリオーニなど女性スターダンサー中心に興行を行うようになっていく過程を検証する。本節では、女性スターダンサーばかりが脚光を浴び、報酬面でも、男性と女性とでは主役クラスで5倍から10倍の格差があったため、オペラ座からは男性ダンサーの数が年々減少していき、優秀な男性ダンサーや男性振付師がイタリアやロシアに流出するようになることが指摘される。

**第3章「物語の単純化」要旨**

第3章は、1831年以降、オペラ座で上演されるバレエ作品が、観客の理解を容易にするため、物語の展開と物語世界における人間関係が単純化、規格化される現象に注目し、ロマンティック・バレエの代表的な作品20点について、ロマンティック・バレエ特有の諸様式を指摘する。

高橋氏は、本章の第1節「プレ・ロマンティック・バレエ」と第2節「ロマンティック・バレエ」においてイヴ・セジウィックのホモソーシャルな「性愛の三角形」理論を援用し、主人公の男性が2人の女性との間で悩み、やがて破滅するというロマンティック・バレエの定式的な筋書きを、男―女―女の「感情の三角形」という高橋氏独自の関係性から分析する。この2節では、ロマンティック・バレエの代名詞的作品3作、『ラ・シルフィード』、『ジゼル』、『コッペリア』が取り上げられ、それぞれにおけるロマンティック・バレエの特性が、「性愛の三角形」と「感情の三角形」の関係性から検証されている。

第３節「クラシック・バレエ」は、ロシアのクラシック・バレエの代表作『眠れる森の美女』と『白鳥の湖』を前節と同様のアプローチによって分析し、ロマンティック・バレエの諸特性を後発のロシア・バレエとの比較からより明確に検証している。

［総括、評価］

本論文は先行研究の諸成果に対しほぼ網羅的に目配りしつつ、女性ダンサー中心へのパラダイム転換に注目することにより、娯楽コンテンツとしてのロマンティック・バレエの諸特性を独自の論点から検証し直した労作である。従来の研究においては、オペラ座の民営化、ロマン主義運動、伝説的女性ダンサーの伝記、照明技術の発達など、ロマンティック・バレエと関わる対象が個別的に分析され、相互の関連性が必ずしも明確にされてはこなかった。その点、本論文は「性の二重基準」というジェンダー研究の枠組みを用いることにより、社会的背景や文化的背景、テクノロジー的背景がロマンティック・バレエ興行特有のスターシステムにどう関わっていたかを具体的に指摘できた点が高く評価された。本論文の独創性および意義は、ロマンティック・バレエが今日でも健在な高級文化としてのバレエ「芸術」の起源となると同時に、物語世界の規格化・単純化や男性ダンサーの排除、女性ダンサーの高級娼婦化など、衰退をもたらす負の要因を当初から内包していたことを明らかにできた点にある。高橋氏は、19 世紀のフランス語および英語一次史料から、最新の女性研究を含めた多領域にわたる二次史料を豊富に引用・参照し、1830 年代の隆盛から 19 世紀末の衰退に至るまでの歴史的経緯と因果関係を実証的に説明できており、本論文の成果は今後のロマンティック・バレエ研究において大きな貢献を果たすことが予想される。

以上、審査委員４名は全員一致で、本論文が博士（表象文化学）を授与されるにふさわしいと判断した。

論文審査主査　中野　春夫　教授
大貫　敦子　教授
マレ　ティエリ　教授
鈴木　晶　特別非常勤講師
（法政大学　名誉教授）
（早稲田大学大学院　客員教授）